

坂本一成の「House SA」

文 藤森照信 写真/下村純一

第四十一回 原・現代 住宅再見



1/左下から上りはじめ、突き当たりをまわって、右手前へとスパイラル状に上ってくる。垂直面には棚がつくられ、水平面には机が置かれ、いずれにも物品がとこるせましと置かれている。2/外観は扁平で、2階がちょっと迫り出すところが坂本流。

物品の詩学

見ることにかけては、百戦錬磨というか、すれっからしというか、いささかの自信をもつ私にすら初めての光景が、そこには広がっていた。



6

5

5・6・7／ゆるやかに傾いた空間に、左右の棚にも机の上にもさまざまな物品が、一見すると雑然と、よく見ると整理されて並ぶさまは、物品が生きているようにとてもいい。しかし、それはこの空間を下から上へ、上から下へと歩いて初めてわかることで、写真だとただ物だらけに写ってしまう。写真5と7は見返しの室内光景。

7



4 3

3／スパイラル状だから何階と言いがたいが、一番下のドン詰まりは食堂となっている。年季の入った焼き物のコレクションに囲まれ、らしい焼き物の食器を使って食事する坂本一成(左)と筆者(右)。4／左のタラップを上ると写真1へ、右を下ると写真3へと続く。

られる多木浩二は、「House SA」のようなきわめて難しい建築について、頭を悩ました「あるとき私が〈SA〉を理解しあぐねているのを見て、私が〈SA〉を美的に理解しようという見当違いをしているのではないかと批判した人がいた」(いずれも『進歩とカタストロフィ』(青土社))。私もときには建築を見ても分からないものもあります。最近で、ものすごく難しくかつたのは坂本一成氏の自邸、〈House SA〉です。あれを見たときに、これはいったいなんだろうと思いましたが、「批評とは何か」『建築雑誌』2004年9月号)と書いている。よくわからん、と告白しているのである。

私も、発表された写真と図面から、多木さんと同じあいまいな印象をもったのだが、外観をひとつとおり眺めた後、一歩中に入って、目を見張った。

見ることにかけては、百戦錬磨といつかすれっからしというか、いささかの自信をもつ私にすら初めて的光景が、そこには広がっていた。玄関入り口から入った室内は、斜路とステップを巧みに利用しつつ、スパイラルを描きながら、といつても家だからまわり階段のような明快なスパイラルは不可能で、そういわれて平面図を見ればそうわかるようなスパイラルなのだが、とにかく普通でいえば3階段を一続きの空間がまわりながら上昇していく。このスパイラル空間構成がまず

珍しかったが、驚いたのはその光景ではない。この光景は、発表時の写真と図面で知っていたが、ただ困惑させられただけだった。おそらく根強い坂本ファンもそうだっただろう。なんで少しずつステップで上りつつスパイラルするよくな複雑で不便なことをわざわざするのか、という反発すら覚えたかもしれない。今こう発表時の写真を眺めていても、そう思う。なんでコンナ状態の写真を出してしまったのか。

私

が驚いたのは、スパイラル空間に納まっている物品の光景だった。物、物、物……モノ、モノ、モノ。正確にいうと、収納された物品がごくりあがる室内光景に驚いたのだった。発表された写真をちゃんと見れば、壁という壁のいたるところに棚が造り付けられているが、そうした棚にギッシリと本やら焼き物やらの物品が納まり、さらにステップ状の床面に椅子、テーブルが置かれ、テーブルの上にはさまざまな物品が並ぶ。

ふつう住宅は、家具調度が入り、そこで人の暮らしがはじまって初めていきいきとしてくる、といわれるが、この住宅は、じつは、物品が納まって初めて生きてくる住宅だった。坂本の作品集は『住宅』『日常の詩学』と題されているが、ことこの住宅に関しては「物品の詩学」といったほうが正確だろう。住宅と物品□□ほとんど考えられてこなかったテーマといつてい

8



8／車庫と玄関口が一緒というのも坂本流。直進するとテラスへ、右のドアが玄関下。

いだろう。家具のことはたくさん語られ、家具が身体の延長であることは今では多くの人が知っているが、では、家具や棚や床のそこそこに納まり散らばり、時に部屋を占有するあの多種多様な物品たちは住宅にとって、身体にとっていったい何なのか。身体の延長とも思えないし。

これまでの住宅設計、とりわけモダニズムにあつては、物品は見せないようにするのが無言の決まりごとだった。物品とは、隠せばいいってものなのか。時代はオタクに向かつてまっしぐら。オタクの時代とは物品の時代にほかならないだろう。家具から物品へ、そういう向きに風が変わりはじめていくかもしれないのだ。その証拠になるかどうか、ときどき、週刊誌やテレビなどで目にするオタクな人の部屋の写真を見ると、椅子もテーブルもなく、

原・現代住宅再見

あるかもしれないが目につかず、床から壁までギッシリ埋まる物品のなかに身体が座っている。

住宅と物品、というテーマを抱えているかもしれないと思われる住宅作家としては葛西潔がいる。壁が棚を兼ねるような木構造を使っているからそう推測しているのだが、これまでの住宅を写真で見



9 / 1階のトイレ。ここも棚が幅を利かす。10 / 周囲の丘陵を切り開いた郊外住宅地のなかに納まる外観。外観からは中の独自性はうかがいられない。

ると、物品が空間の不可欠の表現要素となっている例は残念ながらなかった。

「House SA」は、SAの字でわかるように坂本さんの自宅。建築家は、自宅ですべて自分だけのテーマを追求することが許されるが、それが坂本一成にとっては、住宅と物品、ということではなかった

坂本一成

Sakanoto Kazunari

1943年東京生まれ、東京工業大学建築学科に入り、清家清、篠原一男に学び、現在同大学大学院教授。人間の器としての住宅をブレることなく探究し、著書も『坂本一成 住宅』□□日常の詩学（TOTO出版）のような住宅ものに限られ、現代における確信的住宅作家として名高い。90年「Longue」□□88で日本建築学会作品賞、92年「コモシシティ星田」□□92で村野藤吾賞受賞。

藤森照信

Fujimori Terunobu

建築史家、東京大学生産技術研究所教授。建築家。著書に『明治の東京計画』岩波書店・毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険』東京篇（筑摩書房・日本文化デザイン文化賞）・サントリー学芸賞、建築作品に『赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）』（97・日本芸術大賞）、『熊本県立農業大学校学生寮』（2000・日本建築学会作品賞）などがある。

のか。

そ

う思つてこの住宅の特色をあらためて見直すと腑に落ちる。設計者がそう

自覚しているかどうかは関係ない。設計者の自覚していることしか表現されていない建築なんてたいしたもんじゃなない。ある時代の制約のなかで設計者の意識によつてつくられた建築が、時代を越えていく力をもつのは、設計者の意識も気づかないような無自覚な深さを建物が自ずと秘めている場合に限られる。

坂本が試みたステップ状の珍しい床は、物品収納に最もふさわしい棚という形式を、一段ごとに水平にズラした形ではないのか。

スパイラル連続構成も、空間ではなく棚を連続したかったからではないか。空間と物品、というテーマの古典といえるのは図書館の

大閲覧室で、「大英博物館閲覧室」

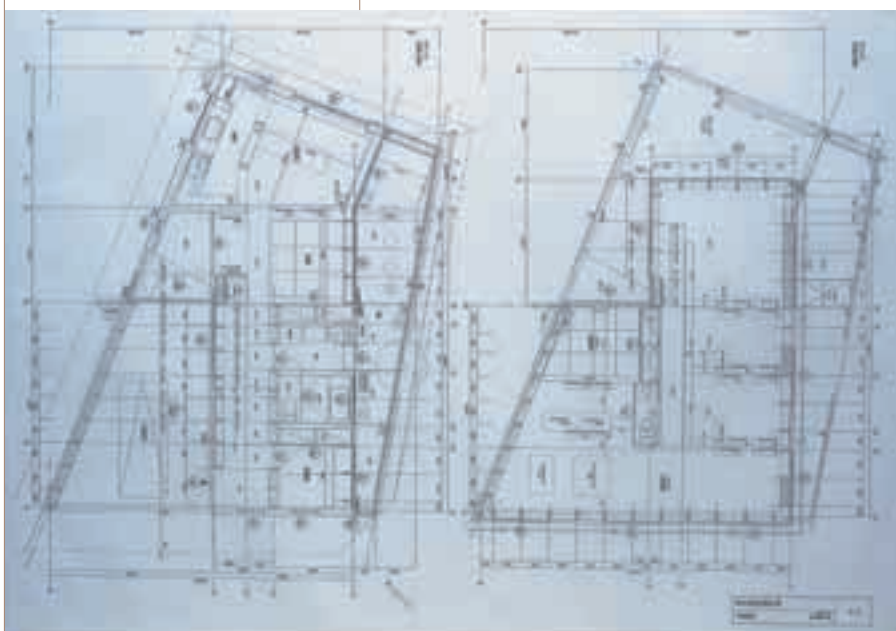
（1857）もアスプリンド（Enric Gunnar Asplund）設計の「ストックホルム市立図書館」（1927）

も、円形平面をとることで壁に取り付く書架が視覚的に無限連続するようになっていくが、坂本のスパイラルも、原型は円ではないのか。古典的な円に垂直方向の動線を加えるとスパイラルとなり、棚は本場に無限に続くことが可能となる。

物品は、建築に、スパイラルを求めている。この求めに応じたのが「House SA」だった。



House SA	
所在地	神奈川県川崎市
設計	坂本一成
施工	渡辺組
構造	木造+RC造
規模	地下1階 地上2階
敷地面積	178.61㎡
建築面積	82.00㎡
延床面積	185.51㎡
竣工	1999年



図面提供 / 坂本一成

S=1/250